



ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお届け。今回は、英国のEU離脱について。

全英OPPの呼称はスコットランドOPPに？

全英オープンにはヘンリック・ステンソンの優勝で盛り上がりましたが、やはり現地のゴルフファンたちの話題は6月英国での国民投票でEUからの離脱が決められたことでした。また、スコットランドの残留の話題もあり、冗談半分で「次回から全英オープンではなく、スコットランドオープンになる」と、会場のパブで赤い顔をしたスコティッシュのファンの方も盛り上がりつつありました。聞こえてくるゴルフファンのお話では、ライダーカップにおいて、イギリスが開催地から除外されたり、選手も選出されなくなるだろうという熱心な議論が交わされていきました。ちなみに、ヨーロッパツアーの本拠地はイギリスのウェントワース・クラブに隣接していますので、これも移動することになるのかもしれませんが。

暴落したポンドの影響ででしょうか、今回の全英オープンのシヨップでは、アメリカ人が大量にノベルティーを購入しているのを見かけましたし、外国からのギャラリイも例年より多く見られました。ゴルフ関連を生業としているゴルフ場やキャディーなどの関係者にとっては、ポンド安により海外からのビジターが増えるのは、一時的、短期的

とは言え、良いニュースだったのかもしれない。

しかし長期的に見て、今後のEUと英国政府の交渉次第では、英国とEUの間で通関が難しくなることは大いに考えられます。たとえば、スペインのゴルフリゾートに家を持つツイギリス人の場合、今後その不動産に対する課税条件も変わってくるでしょうから、交渉に数年かかるとはいえず、思い切った移住したり、はたまた不動産を処理する方も増えるかと思えます。

Vol.33
英国のEU離脱

国境を越えたラウンド旅行も困難に。

ゴルフファンへの影響はどうでしょうか？ 日本にいと、車で国境を越える意識がありませんが、典型的な英国のゴルフファンたちは、メンバーになっているゴルフクラブの仲間と年に数回、クラブを車に乗せてアイルランドやスペインへのゴルフ旅行を計画します。英仏海峡があるとはいえ、国境はほぼスルーで移動できるので、たとえばアイルランドと英国に属する北アイルランドの間には検問所もありません。ですから、夏の長い日照時間を利用して、たとえばアイルランドのThe European Club(今になると皮肉な

ゴルファーにも影響のある英国の離脱騒動。



名前ですわね……)で午前中にラウンドして、車で北アイルランドに移動、お昼にギネスを一杯、ロイヤル・ポートラッシュでもう1ラウンド、というパッケージがポピュラーです。しかし、これも国境での通関に時間がかかると、不可能になるかもしれません。

今話題のアメリカ大統領候補のトランプ氏も国民投票が実施された直後、自らが所有するターンベリーを訪れていました。英国のEU離脱へのコメントの中でポンド安を容認、アメリカ資本の対英国投資が増えるなどのコメントがありました。自らのゴルフ場買収を例に挙げてのアピールですが、ヨーロッパに変わりアメリカとの関係が強化されるのでしょうか？ もししたら、今後PGAツアーの大会が、英国で開催されるようになるかもしれません。

ゴルフビジネスのプロフェッショナル 神野方仁(じんの・みちひと)



1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外のさまざまなスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary; www.tpi-j.co.jp/ceo_blog/

イラスト/ソリマチアキラ